サービスラーニングでの気づきと学び

社会福祉学部社会福祉学科２年　松井　隆佳
活動先：ＮＰＯ法人エンドゴール
ゼミ：村上　徹也　先生

私はサービスラーニングで活動したことにより、若者支援という他のＮＰＯとは違う経験をすることができたと考える。サービスラーニングで活動していく中で、ＮＰＯの職員の方々やインターンシップで来ていた他大学の学生、地域の人など様々な人と交流し活動することができたことにより、自分を成長させる場になったと感じた。

具体的には人とのコミュニケーション能力が、活動する前と後で変わってきたことだ。私は昔から人と会話すること、コミュニケーションをとることが苦手であり、自分の思いや考えを相手にうまく伝えることができていなかった。エンドゴールでは活動に入る前に毎回必ず、職員とインターンシップで来ていた他大学の学生たち全員で、朝礼を行っていた。朝礼では、毎回新しくお題が出されそのことについて自由に挙手し、自分の意見や感想を発言し情報を交換、共有することを目的に行う意見交換をしていた。私は活動初日ということもあり、緊張していて自ら手を挙げて発言することに正直抵抗を感じていた。自分が考えた意見が他の人に否定されるのではないか、などと勝手に思い込みなかなか発言することができなかった。職員の方の気遣いで、発言することができない私が発言できる機会を作っていただき、自分の考えを言うことができた。そこから全員で自己紹介など自分を紹介し合い、お互いを知ることから始まり、徐々にではあったがエンドゴールの環境に慣れていき、自分から意見を発言することができるようになった。人とコミュニケーションを取ることが苦手であまり人と話さなかった自分が、いろんな人と会話することにより積極的に発言できる自分へと変化していくことができたのである。コミュニケーションを取る必要性を体験から学ぶことができた。また活動を通じて同じ活動する仲間や活動先の人、インターン生と協力し合う大切さを学び協調性を養うことができた。

エンドゴールで６日間、主にやった活動内容は、今実際に作ろうとしている若者支援基金の土台作りである。エンドゴールの事業内容は、若者支援事業だが具体的にどんなことをしているのか、自分たちがここで何をするのか何ができるのか、事前の活動先の下調べだけでは不明な点が多く若者支援から若者支援基金というものまでどのようなものなのか解らないまま活動が始まった。だから最初に若者支援基金について考えてほしいといわれたとき、何から始めればよいのか解らなかった。職員の方々から助言やサポートをしてもらい、貧困で困っている若者(学生など)を支援するための基金の土台を作ることになった。

またそこでエンドゴールの具体的な活動内容と団体の理念などを代表の方から説明していただき、エンドゴールについて理解していくと共に若者支援基金についての意見の出し合いをするため、基金の事例について調べることをした。意見を出し合う中で様々な課題に直面した。まずこの基金の対象を誰に、そしてどんなものにするのかだ。若者といって

も中学生なのか高校生なのか大学生なのか、就職活動している人限定なのか、お金の給付は他の制度がやるべきなのではないのか、年収による制限を設ければグレーゾーンの人はどうするのか。その他にも就職活動でスーツがない人へスーツの貸し出しなどをするなど物で支援をする考えも出たが、その後仕事が決まった人からスーツを返却してもらうとなると、会社に来ていくスーツをどうしたらいいのか、やはり給付したほうが良いのではないのかなど、かなり意見にばらつきが出てきてしまい、話し合いが進まないことがあった。

そこで他のＮＰＯへ訪問して意見などを聞きに行くことになり、ＮＰＯ菜の花、あかり、スマイリードリームの代表の方々と話を聞くことができた。その中で地域というキーワードが比較的多く出た。どこのＮＰＯでも地域とのつながりを大切にしていて、困ったときはお互い様の精神、そしてみんなが使いたくなるような魅力的なサービスを作ることが必要だと学ぶことができた。そこから地域の問題は地域で解決できるような環境を、地域住民が主体となって作っていかなければならないと考えた。基金を集めるにも地域の協力が必要である。また企業と連携して寄付商品を作り売り上げに一部を基金に回してもらうなどの考えが出た。人と人とのつながり、輪、がこの若者支援基金には必要であり、地域の問題は地域で解決できるようにする考えを若者支援基金に入れたいと考えたのである。

そこで気が付いたのが地域には高齢者が気軽に交流できる場所があっても、若者が気軽に交流することができ情報交換できる場所が少ないことだ。エンドゴールには、若者を対象にフリーステーションという様々な分野で活躍されている社会人の方を呼び、情報共有できる話し合いの場が開かれている。しかしこのような場があること自体あまり知られていない。若者の交流の場が少ないことが地域の課題ではないかと考える。

今回の活動を通じてエンドゴールという私にとって大きなつながりができた。自分が地域の一員として主体的に情報を発信していくことで、身近にいる人にＮＰＯという存在を知るきっかけを作ることができる。自分から情報を発信し、小さい輪を作り大きくしていき、若者同士の意識を高め地域問題に興味を持ってもらうことが重要である。そこから地域のつながりを増やすことにより、気軽に集える場を作っていくことで地域住民の意識、つながりを強くしていき、地域の問題を地域で解決していける環境ができていくのである。

ＮＰＯが抱えている課題は、地域の課題でもある。理想的な状態はＮＰＯがなくても大丈夫な社会を創ることである。そのためには、国が福祉分野に積極的に介入していくことと、ＮＰＯの社会的地位が向上することが必要である。また私自身、地域の一員でありながら地域とのかかわりが薄く、地域の問題について考えることがほとんどなく、傍観者になっていた。しかしサービスラーニングを通じて、人任せにするのではなくもっと地域問題の意識を持ち、自分たちが主体となって行動することが地域をよくしていくことにつながるのだと気づくことができた。私たち一人一人が意識し課題に取り組むことでよい地域づくりをみんなですることができ、地域のつながりを作ることができるのである。私はこのサービスラーニングで学んだつながりの大切さを今後に活かしながら、自分から積極的に動いて地域とのつながりを大切にしていこうと考えている。